

「切なる願い」

ピリピ1：19-26

堀田修一 21・10・3

I 獄中にいたパウロが知り確信していた事→「というのは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の支えによって、私が切に期待し望んでいるとおりに、このことが結局は私の救いとなることを知っているからです」：19。

1. 獄中にいるパウロを支え助けたのは、

- ① 「あなたがたの祈り」。兄弟姉妹のとりなしの祈りはパウロ、そして私達を支える。主にあって祈り支え合う事は、非常に幸いな事。距離が離れていても。パウロは「自分はいつも人を助ける側であって、自分は祈ってもらう必要はない」等とは決して思わなかった。彼は心から祈りを要請した。「私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください」(エペソ6：20)。私達も、これからも、ますます祈り合い支え合いたい。祈りは決して空しくない。神は本当に祈りを聞いておられる！「あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます」(マタイ18：19)。※皆様への感謝。
- ② 「イエス・キリストの御霊の助け」。御聖霊は、主を信じる私達の心の中に住んでおられ、私達を励まし慰め、間違いに気づかせる素晴らしい助け主。獄中のパウロを、そして試練の中にある私達を御聖霊は励まし強め、困難な中ですべてを支配されている神に心の目を向けさせて下さる。御聖霊は事実、私達の心の中におられる。

2. 「このこと（：12-18）が結局は私の救いとなる（原語：救いという結果になる、結局、救いになる）ことを私は知っているからです」。投獄されても、反対者、苦しめる者がいても、神は生きておられ、みわざを行われる→「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました」(創50：20)。「私の救い」=釈放の事ではなく、主の姿に成長する・つらい苦しみを通して神の深い憐れみをさらに深く味わう・主を深く知り続ける(3：8-12)・私の身によってキリストがあがめられる(：20)・キリストが宣べ伝えられ人々が救われる。個人で終わらない救い。「神を愛する人々、すなわち神のご計画によって召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ8：28)。「知っている」(ピリピ1：19、ローマ8：28)が、非常に重要！これはただの頭の知識ではなく、知り、心得、理解し、分かり、悟り、見抜き、認める事。

Ⅱ パウロの切なる祈りと願い。

1. 「私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても私の身によって、キリストがあがめられることです」：20。彼の切なる願いは、自分自身があがめられる事、自分の思い通りになる事、自分が得をするかどうかではなく、生きるにしても死ぬにしても、主を大胆に伝え、自分の身によってキリストがあがめられることだった。獄中にあるパウロのこの真剣な言葉を聞くと、私は、襟を正され励まされる。
2. 「私にとっては、生きることはキリスト」：21→
 - ① 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」(ガラテヤ2：20)。
 - ② 素晴らしいキリストと共に生きる。
 - ③ 私にとって生きる事は、自分のために生きるのではなく、私のために死によみがえられ愛して下さっているキリストのために生きる。「主に喜ばれることが何であるかを見分け」(エペソ5：10) ながら歩む。
3. 「死ぬことも益です」：21。パウロはいつ出獄できるかわからなかった。獄中で死ぬ可能性もあったことだろう。しかし、彼は決して悲観的になっていない。「死ぬことも益」、なぜ→死ぬことは永遠の滅びではなく、「世を去ってキリストとともにいる」(：23) ことだから。パウロにとって真の益、喜び、幸いはキリストご自身であり、キリストと共にいる事だった。死は、主を信じないすべての人にとって罪の刑罰としての死。しかし、主が人間の罪の身代わりとして十字架で死なれた大きな恵みによって、この主を信じる私達の罪の刑罰は終わっており、主を信じる者にとり、死とは滅びではなく、天国(主が迎え共におられる所)への入り口となった。だから死ぬことも益。※今年の地区聖会のメッセージで受けた恵み→これまで、私は、キリスト者が「死ぬことも益」とは、死んでも、永遠の滅び、地獄ではなく、天国で、最高に素晴らしいキリストとともにいる恵みに与えられる事までは理解していた。それに加えて「キリストとともにいる」とは、何もすることがない平安ではなく、主と共にいられる幸いだけでなく、天で、救いの子羊なるキリストを礼拝できる恵みなのだと言われた。私たちが人間と全被造物は、天地の造り主であり、救い主である神と救い主なる子羊キリストをほめたたえ礼拝する為に創造され救われた。それ故に、地上でも、死を迎えて天でも父なる神と子羊なるキリストを礼拝出来る事は最高の喜び、幸い、存在の目的である！パウロの切なる願いは、「私の身によってキリストがあがめられること」：20。彼の願いは、生きる事は、キリストを崇める事、死ぬことも天でキリストを崇め礼拝する事。2021年間、ずっと天で行われている礼拝(主の祈りで祈る「みこころが天でおこなわれるように」天では、常に、みこころにかなう素晴らしい神への礼拝が捧げられている)＝「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい(私達罪ある者も主を信じる時、罪のない主の衣、義の衣を身にまとう者とされる)、…彼らは大声で叫んだ。『救いは、御座に着いておられる私たちの神と、小羊にある。』御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物(天使的存在)の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、

神を礼拝して言った。『アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。』（黙示録7：9-12）。

4. 「しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません」：22。主は、主を信じ主とつながっているパウロ、そして私達を、御心の時まで生かし、主にとどまり祈りつつなす私達の働き、御言葉の種を蒔く、福音を伝える働きで人が救われるという実を結ぶようにされる。「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます」（ヨハ15：5）。

5. 「私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかに望ましいのです。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です」：23, 24。パウロの願いは、世を去って、愛する主のもとに行き、素晴らしい主と共にいる事、主を礼拝し崇める事。しかし、彼にはまだ、主からの使命（人々の救いと成長の為に祈り奉仕をする事）が残っていた。自分の願いよりも優先すべき事→主のみこころ。「真にすぐれたものを見分けることができますように」：9。私達が苦しみのあるこの世にとどまる目的は、主からの自分への使命を果たし、素晴らしい主を伝える事。そして、ついに御心の時に死が訪れる時は、真の我が家、真の故郷、私達を愛しておられる主のもとに行く事ができることを喜ぶのです。時が来ての告白「私は今や注ぎの供え物（殉教の死）となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」Ⅱテモテ4：6, 7。

祈り：生きるにしても死ぬにしても私の身によって主が崇められますように。